

---

# 朝のひととき

ムネソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朝のひととき

### 【Nコード】

N9871P

### 【作者名】

ムネソラ

### 【あらすじ】

ある状況下での、ちょっとした朝の光景

目が覚めると僕は顔を洗って朝食の用意をした。納豆に白飯、ついでにスクランブルエッグでもつくって、こたつ机の上に置く。

スクランブルエッグの上に醤油をかけた頃には、この小さなワンルームの部屋が朝食の匂いで満ちていた。

ズルズルと納豆ご飯をかき込む、温かいご飯と納豆の粘り気が口の中で混ざり合い、時折トッピングの辛子が存在感を主張する。スクランブルエッグに箸をのばせば、いつもとかわらない安心するよくな甘さと、醤油の塩気がたまらない。

まだまだ熱さの収まらない内に朝食をすべて食べ終わると、僕はまだ窓のカーテンを開けていないことに気がついた。僕は立ち上がると窓の所まで行き、カーテンを開けた。

相変わらず外は異次元の空間だった。セットの絵の具を全部絞り出して、ぐちゃぐちゃとかき回したような世界。

ある日目が覚めると、窓の外がこうなっていた。これが本当の異次元の空間なのかは分からないが、そう呼ぶしか僕は思い浮かばない。

別に玄関から外に出れば、そこは普通の世界に繋がっている。いたい何がどうして窓の外がこうなってしまったか分からないが、普通に生活するにあたってこれまで支障がなかったので、あえてこのことはスルーして、何事も無かった様に生活してきた。

あれからもう半年になるか……。

半年経っても全く変わらず今も異次元で、また朝起きれば元に戻っていたと言うことも起きない。

そろそろ対策を考えた方がいいだろうか？

僕の住んでいるこのアパートは築5年と比較的新しく、内装もまだ綺麗だ。部屋は二階にあって、窓の外にはベランダも無く、腰ほどの高さのところに冊子の下がある普通の窓で、少し外に飛び出る

様に手すりがあり、上の方には物干竿がかけられる器具がある。ちなみに僕はいつも近くのコインランドリーで洗濯乾燥までやるので、物干竿はおろか、洗濯機も持ってない。

換気口もあるし、だから滅多なことでは窓を開けていなかったのだが、窓の外が異次元になってからさらに開ける機会はなくなった。でも一度だけ、この半年間で窓を開けたことがある。どうしようもなく窓の外がどうなっているのか気になったからだ。

結果から言えば（まあ特に結果しか無いのだけど）、窓の外の空間はこの部屋のアパートの外壁しかなくて、その四角形の面以外は何も無い、歪んだ世界の中にぽつんと1部屋分のアパートの外壁が浮かんでいて、それ以外何も無いという感じだった。

正直それだけ分かれば十分で、僕はそれ以来窓を開けていない。不思議じゃないと言えば嘘になる。気にならないわけは無かったけれど、でも僕はどうしたらいいのだろうか？ 窓の先が異次元だからといって、僕は何をすればいい？ たとえ何かすることがあったとしたら、たとえそんなものがあつたとしても、なんかもうどうでもよかった。

もう半年になると、初めからそうであつたような気もしてくる。初めから窓の外は異次元で、不動産屋から紹介されたときからもうこうで、僕はそれを承知で借りて、むしろどの部屋だつてこうだった。僕の部屋だけではなくて、それこそ世界中の部屋の窓が異次元に繋がっているんだ。

そう思うと何のことはない。

別に外に出られない訳ではないし、電気ガス水道も問題ない。テレビだつて当たり前前に映る。確かこうなる前は1メートルか2メートル先に建物があつたはずだから、むしろ開放感があつてこっちの方がいいくらいでもあつた。

そうだ、考えてみれば窓の外が異次元に繋がっているだけであつて、ただそれだけのことなんだ。

僕は窓から離れこたつの上の食器を片付けると、リモコンでテレ

びを付けた。最近買った22型液晶テレビには、綺麗なHD画質で朝の情報番組が映し出された。今は天気予報がやっていて、今日の東京は何でもすこぶる晴天らしい。

僕は窓の外に目を向けた。

そこには相変わらず、グネグネとうねる異次元の空間が僕を見下ろしているだけだった。

(後書き)

なんだかフラットなものが書きたいと思って書いたら、こんなものができました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9871p/>

---

朝のひととき

2011年1月12日20時24分発行